

OVERWATCH 2

ヒーローたちの夜明け

競い合う友



JUSTIN GROOT, GAVIN JURGENS-FYHRIE, MIRANDA MOYER 著

ストーリー

*JUSTIN GROOT, GAVIN JURGENS-FYHRIE,
MIRANDA MOYER*

アート

HANNAH TEMPLER

編集

CHLOE FRABONI

制作

BRIANNE MESSINA, AMBER THIBODEAU

デザイン

JESSICA RODRIGUEZ

ストーリー監修

MADI BUCKINGHAM, IAN LANDA-BEAVERS

ゲームチーム監修

*JEFF CHAMBERLAIN, GAVIN JURGENS-FYHRIE,
PETER C. LEE, MIRANDA MOYER, DION ROGERS*

スペシャルサンクス

IAN LANDA-BEAVERS, MADDIY COOK

日本語翻訳

CHI ICHIKAWA



© 2024 Blizzard Entertainment, Inc.

Blizzard and the Blizzard Entertainment logo are trademarks or registered trademarks of Blizzard Entertainment, Inc. in the U.S. or other countries.



「まあ、確かにマズい状況だよな」と、鎖につながれたまま鼻を搔こうともがきつつ、ジャンクラットは言った。

一方、彼の相棒のマコ・ラトリッジ、別名ロードホッグは、巨大な体躯を嚴重に拘束されたまま一言も発しない。壁の高い位置に設けられた鉄格子付きの窓から、バリバリと金属が潰れるような音とともに叫び声が聞こえてくる。アリーナで誰かが、体の一部を失ったのだろう。

しかし、ジャンクラットはそんな騒音には構わず、相棒の方をじっと見つめている。まさか、ロードホッグともあろうものが緊張しているのか？「落ち着けて！おしゃべりは“全部”オイラに任せとけばいい。事態がマズい方に転んでも、女王サマにお宝の場所を教えてやりゃあ済むんだから」¹

ロードホッグはやはり答えない。

「心配すんなって。オイラと女王の仲だからな！固い絆で結ばれてんだ！いや、そりゃオイラとオマエほどじゃないがな」と、ジャンクラットは慌てて付け加える。「むしろ、なんというか……」

床タイルの割れた破片を汚れた爪先でつつきながら、少し考えるように間を置く。

「競い合う友、ってやつだな！まあ、ちょいとばかり競い合う方が強くなることもあるが、敬意はあるからな。“互いに”尊敬の念を持ってんだ」

¹ ジャンカータウンに隠された秘密のお宝についてジャンクラットが何か知っているということは、オーストラリア大陸全土で公然の秘密となっている。放射能で汚染されたアウトバックを百マイル進んだとしても、その地の隠者が「ジャンクラット？聞いた名だな。確か、秘密の宝を持っているとか。しかも、そのことをペラペラと話して回っているんだろう」と言うであろうほどだ。

ロードホッグの不平がましい唸り声を、ジャンクラットは肯定の証と受け取ったらしい。

「だから、お小言の一つや二つはもらうだろうが……」と言いながら、ジャンクラットは肩をすくめる。「セイイある謝罪をしておけば、どぶさらい程度でチャラにして貰えるさ。そいつが済めば、バーに戻ってタピオカティーにココロギチップスといこうぜ！」

それを聞いても、ロードホッグに安心した様子はない。むしろ、ジャンクラットの目には悩みが“増している”ように見えた。

「分かったよ。確かに、何日かはぶち込まれるかもしれねえ。でも、長くて1週間ってとこだ。心配してんのはそんなことか？」

ロードホッグからは沈黙しか返ってこない。

ジャンクラットが指を鳴らす。「ああ、今すぐずらかろうってか！そりゃそうだ。おとなしく刑を待つことはねえ。犯罪の天才、ジャンクラット様とロードホッグ様なんだからな！本当なら、今頃トンネルでも掘って地上まであと少しってところでもおかしくねえ！よーし、やってやろうぜ！」

しかし、ロードホッグが立ち上がって壁から鎖を引きちぎることはなかった。ジャンクラットは苛立ちを覚え始める。

「じゃあ何だってんだ？何ぼさっとしてんだよ！」

独房の扉が勢いよく開け放たれる。

「待たせたな！お楽しみ処刑の時間だ！」と、看守が無慈悲に宣言する。

珍しく、ジャンクラットは言葉を失った。

ロードホッグが、ほっと溜息をつく。

「やっとかよ」

錆びた鉄のスクラップで作られた、砂と汚れとガラクタだらけの巨大闘技場スクラップヤード。中央に聳える金属製の塔には、ロボットのパーツなど雑多な品が吊るされている。

周囲を取り囲む壁の上に設けられた客席は、観客でいっぱいになっている。そのほとんどが、昔からジャンクラットをよく知る顔なじみだ。その光景に感動したかのように彼が嬉しそうに手を振ると、客席からは生卵が投げ返された。

「おい！見てたぞ、スカンボ・ウィグリー！」と、ジャンクラットが客席に向かって騒ぎ立てる。「恥を知れ！ジャンカータウンでは、賢くも慈悲深い女王陛下の命により、囚人には敬意をもって接することになってるんだからな」

ロードホッグが、彼の肩をポンと叩く。

ジャンクラットが頭上に目をやると、はるか上のリングを見渡せる足場からジャンカー・クイーンがこちらを見下ろしていた。2メートルを越す傷跡だらけの巨体に、アーマーとナイフを装備してい

ジャンクラットが頭上に目をやると、はるか上のリングを見渡せる足場からジャンカー・クイーンがこちらを見下ろしていた。2メートルを超す傷跡だらけの巨体に、アーマーとナイフを装備している。背中に吊るされたご自慢の斧カーネイジは、彼女の敵に待ち受ける残酷な末路を見る者に想像させずにはおかない。

る。背中に吊るされたご自慢の斧カーネイジは、彼女の敵に待ち受ける残酷な末路を見る者に想像させずにはおかない。

彼女の顔には笑みが浮かんでいたが、それは決して友好的な笑みではなかった。

「貴様らに払う敬意などあるものか」と吐き捨て、続ける。「処刑でもなければ、視界に入れることすら不愉快だ」

「そいつはひでえぜ！ロードホッグもオイラも、忠実な臣下だったのに！何かの疑いが掛かってるなら、ちゃんと説明を聞きたいね！」

ジャンカー・クイーンは、冷たく彼に一瞥をくれる。

「いいだろう」と頷き、数え上げるように指を一本上げる。

「ジャンカータウン正門の破壊未遂」

「防衛設備の強度を確かめようとしただけだ！」

「アウトバック・ビルの極上ソーセージ屋台の爆破」と容疑を数え上げていくに従い、指の本数も増えていく。

「しかも、常連客数名を巻き添えにしたな」

「それは……」とジャンクラットが言い淀み、ロードホッグの方をちらりと見る。頷き返す相棒を見て、観念したように続ける。

「確かに、それはオイラたちだ。ごめんよ、ビル！」

アウトバック・ビルがうなだれる様に座席に座り込む。怒っているというよりも、傷ついた様子だ。

「そして、最悪なのが……」と言って間を取ったジャンカー・クイーンは、拳を閉じながら続ける。「バスケット事件だ」

怒りに満ちた非難の声が場内から巻き起こり、ジャンクラットは客席に向かって言い返す。

「なんだよ！お前らだって同じことをしたはずだろ！」

ジャンカー・クイーンは構わずに宣言する。

「判決を言い渡す。チャンピオンの手による死罪だ」

「自分では怖くて手を出せねえって？」

「ハッ。貴様にチャンスをくれてやろうというんだ。バスケットの件は、なかなか笑えたからな。ほら、受け取れ」と言い終えない内に、クイーンは足元の箱を蹴り落とす。地面にぶつかった箱はバラバラになり、中身が散乱する。

ジャンクラットは「信じらんねえ」とつぶやきながら落ちてきた品をゴソゴソと探り始め、6発のグレネードが装着されたシャレた弾帯を手取る。ロードホッグは、左腕にチェーン・フックを巻き付けている。

アリーナの反対側にある重厚な鉄扉が音を立てて上がり始める。奥の様子は、真っ暗で窺い知れない。

「うれし涙が出そうだけ。チャンピオンその人の手で始末してもらえるなんて、最高の栄誉だ！」

「勝手に死ぬ」と、ロードホッグが冷たく言い放つ。

「俺は死なない」

「ティンカーズ、レッカーズ！デモリショニスト、スカベンジャー……」²と言葉を切り、ジャンカー・クイーンはご自慢の斧を掲げる。

「ここに迎え入れよう。我らがチャンピオン……レッキング・ボールを！」

グラップリング・クローが扉の枠上部に食い込み、巨大なボール状のメックが振り子のように飛び出してくる。ロードホッグがジャンクラットの弾帯を掴み、本人ごと空中へと放り投げる。

頭上では先ほどのボールから対になったクアッド・キャノンが展開され、先ほどまでジャンクラットが立っていた場所に弾丸の雨を降らせた。観衆から、轟くような歓声と指笛の音が上がる。一方、もろに頭から落下したジャンクラットは、事態の変化を面白く思っていないようだ。

「全戦全勝の負け知らずで、一度もメックから降りたことがない！」と、客席から興奮した声が聞こえてくる。

² ジャンカータウンはクイーンが支配しているが、実際にその運営を担っているのは各勢力の者たちだ。スカベンジャーはパーツの探索、デモリショニストやティンカーズは奇抜で愉快な機械の製作を担当している。レッカーズはその名の通り、物を壊して回っているが、一応はタウンにとって役立つ形での破壊を行っている。

「誰もチャンピオンの素顔を見たことはないんだ！」

「なんでだ？すげえブサイクなのか？」と別の観客が応じる。

「あり得るな。でも、考えてもみろよ。この暑さで、“一度も”メックを降りたことがないんだぜ？」

「中はすごい臭いだろうな。きっと、腐ったチーズみたいな臭いだ」と、ジャンクラットが嬉々として話に加わる。

「止まるんじゃない、マヌケ」とロードホッグが溜息交じりに注意するが、メックが大きく跳ね上がって壁にバウンドし、まるでロケットのように向かってきていることには、2人とも気づいていなかった。

ジャンクラットが振り返りながら相手の鼻先に指を突きつけようとするが、すでにロードホッグはそこにいなかった。巨大メックの激突をもろに食らい、はるか遠くの壁に吹飛ばされていたからだ。

石の碎ける音が響き、観衆が顔をしかめる。頭上からは、クイーンの高笑いだけが聞こえてくる。

ジャンクラットは弾帯からグレネードを1つ引っ張り出すと、ピンを抜いて天を仰ぐように顔を上に向ける。自分が、プレッシャーにさらされているほど実力を発揮できることを心得ているのだ。

彼の顔をめがけて飛んでくるレッキング・ボールのクローを、ジャンクラットが飛び退いて回避する。そのまま、シュルシュルとメックに引っ張り戻されるクローのワイヤーを掴むと、勢いに乗って身体が宙を舞う。その姿はまるで、泥だらけの鳥のようだ。優雅とは言い難いその飛行の途中で、先ほどのグレネードがメックに向けて放り投げられる。

「ロードホッグ！」と、地面に向かって落下しながらジャンクラットが叫ぶ。

「受け止めてくれ！」

しかし、ロードホッグは受け止めてはくれなかった。アリーナの端で横たわったまま、ピクリとも動かない。

ジャンクラットが地面を跳ねながら転がっている間に、グレネードは爆発した。よろよろと立ち上がりながら歯が抜け落ちていないか確認したジャンクラットは、先ほどまでレッキング・ボールがいた場所で煙を上げる大穴を覗き込んだ。

レッキング・ボールは、まだそこに“いた”。メックのアーマーは少し焦げ付いているのがせいぜいで、上部の小さなハッチが少しグラついているように見えるほかは、大きな損傷はないようだった。

「ぶっ飛ばしてやる！」と、ジャンクラットが力を込めて叫ぶ。

突然、地の底から湧き上がるようなうめき声が場内に響き渡る。まだピンピンしていたらしいロードホッグが、チェイン・フックを振り回しながら突進し、前方へと投げつけた。ハッチの隙間に深く食い込んだフックを、ロードホッグが全身の力を込めて引っ張る。

メックを覆っているアーマーのパネルが丸ごと1枚、剥がれ落ちた。

メックの操縦席が露わになり、その主の姿が明らかになる。まばゆい光に目をぱちくりとさせるチャンピオンは、1匹のハムスターだった。メックを乗りこなしたりしない一般的なハムスターよりは少し大きく、頭はモヒカン刈りになっている。

観客席が、水を打ったように静まり返る。やがて、誰かがポツリと口を開いた。

「あれが、チャンピオンなのか？」

アウトバック・ビルの声に応じるかのようにハムスターが頭を振る。怒った様子でチューチューと鳴き声を上げると、メックの正面のライトが瞬いた。

「ハムスター語を翻訳。“思い知らせてやる”と、メックから音声が流れる。

観客たちは総立ちとなり、咆哮のような歓声を上げている。

ハムスターはメックの中に戻ると、クアッド・キャノンを展開した。ジャンクラットとロードホッグが飛び退いたあとを、大量の弾丸が引き裂く。

「大丈夫だ、ロードホッグ！」と、息を切らしながら声をかけ、ジャンクラットが次のグレネードを引っ張り出す。

「こんな奴は……距離さえ置いとけば……」

しかし、言い終える前に観客たちが一斉に声を上げ始める。

「回れ！回れ！」

メックが動きを止め、操縦席のハムスターが大きく1度頷く。グラップリング・クローが射出され、リング中央の塔に突き刺さる。

メックはそのままゆっくりと動き始めたかと思うと、どんどんと勢いを増していき、徐々にワイヤーも伸ばされていく。目にもとまらぬ速さで回転する重い金属の塊。まさに、広がり続ける死のゾーンだ。

ジャンクラットとロードホッグは後退を余儀なくされる。

ジャンクラットが、「後悔させてやるからな！」と負け惜しみのようにクイーンに向かって叫ぶ。

クイーンが特等席から身を乗り出し、「グチャグチャにひねり潰されるがいい」と応じる。

グレネードのピンを口で引き抜いたジャンクラットは、回転を続けるハムスターを見据え……

タイミングを計ってグレネードを投げつける。

狙い通りの場所で、爆発が起こる。支えを失ったレッキング・ボールが、アリーナの端に一直線に飛んでいく。壁を突き抜けてからも勢いは衰えず、その音から判断するに3本先の通りまでぶち抜いていったようだ。

観衆は息をのみ、ジャンカー・クイーンが街の様子を伺うのを見つめる。

「奴は無事だ。ビルの新しい小屋がクッション代わりになったようだな」

クイーンがリングに降り立つと、ビルを含めた観衆が歓喜の声を上げる。

「まあ、構わない。貴様らは、この手で始末してやろうと思っていたからな」

「い、いや。そんな必要は……」

ジャンクラットが声を震わせながら訴える。

「それに、オイラが死んだら、秘密のお宝の場所は分からずじまいになるぜ！」

クイーンも観客も、うんざりしたようにうめき声をあげる。

「貴様の宝なんぞに興味はない」と切り捨て、ジャンカー・クイーンがゆっくりと彼のもとへ近づく。

「そうさ、あの悪名高いオイラのお宝さ!」と叫び返すジャンクラットの態度は、尊厳を傷つけられても毅然と耐え抜く本物のヒーローのようですらある。

「最後の扉」を抜けられるのは、オイラだけだからな!

沈黙が広がり、遠くから砂上を転がってアリーナへと近づいてくる苛立たし気なメックの音だけが響いてくる。

「最後の扉って?」と、誰かが尋ねる。

「オムニウム³の扉で、唯一開かないままになってる最後の扉だよ、マヌケ」

「ああ、“あの”扉か」

「最後の扉は堅牢だ。叩こうが、爆破しようが、傷一つつかなかった」

ジャンクラットを睨み付けながら、クイーンが続ける。

「貴様などが入れるわけではない」

「入ったとも。しかもこの通り、出てきた!」

砂上を転がるボールの音が近づいてきた。クイーンが問いかける。

「ほう? 一体どうやってだ?」

「屋根に穴が開いてんだ! いくつもあるが、だんだん小さくなっていく。それで中に忍び込んで、制御室からオイラだけの特別なカギを登録したんだ!」と言いながら、ジャンクラットはクイーンにウィンクをして見せる。

「最後の扉を抜きたいなら、オイラの目が必要だぜ!」

観客たちが、一瞬考え込むように静かになる。だが、結論に達するまでにそれほど時間はかからなかった。

「奴を始末して、目を奪え!」

ジャンカータウンの荒くれ者たちがジャンクラットの元へ殺到し始めるのと、壁に空いた穴からレッキング・ボールが再び姿を現すのが、ほぼ同時だった。そのまま観客をなぎ倒しながら進むメックのボールは、さながら嵐に飲まれた浮きのようだ。アリーナの反対側では、デモリショニストが導火線に火をつけ、ティンカーズが巨大なマシンを起動させている。

アリーナ内では、ロードホッグが両側から迫りくる軍勢を見比べ溜息をつく。

「ジャンクラット……」と、つぶやく彼の言葉を、呼びかけられた本人が引き継ぐ。

「ジャンクラット、お前は天才だ”、だろ?」

3 オムニウムとはクライシス以前に稼働していたロボット工場の総称で、ジャンカータウンはその廃墟を基礎として建設された街だ。オムニウムでは、人間の手助けをする民生用のオムニックのほか、邪悪な神格プログラム「アヌビス」のためのロボット兵も製造されていた。もちろん、ジャンカーたちはとっくの昔にすべて爆破し、その残骸をスクラップとして再利用してしまっている。

「最後の扉を抜きたいなら、オイラの 目が必要だぜ！」

観客たちが、一瞬考え込むように静かになる。だが、結論に達するまでにそれほど時間はかからなかった。

「奴を始末して、目を奪え！」

「ナイフ」

「なんだ、ほっとしたぜ。“マヌケが”とか言われるのかと思った」

「ナイフ」と、ロードホッグが繰り返す。レッカーズの1人が投げつけてきたからだ。

ジャンカー・クイーンが斧を一閃させ、飛んでくるナイフを叩き落とす。

「マコ、奴の言葉は真実か？」

「知らん」

「だろうな」と言いながら、レッカーズの一団に向き直る。

「貴様ら、“私の”街で宝を自分のものにできるとでも思っているのか？」と、クイーンは冷たい視線を投げるが、問いかけが終わらないうちに、デモリショニストたちの爆弾が一斉に炸裂する。砂埃の中、いつの間にかジャンカー・クイーンが、ジャンクラットを庇うようにして立っていた。周囲では、レッカーズが我先に彼を捕らえようと、激しい戦いを繰り広げている。

「やっと貴様とオサラバできると思っていたんだがな」

「俺もだ」とロードホッグが忌々しげにつぶやく。ジャンカー・クイーンが同情するように彼の肩をポンと叩き、やっとここまで辿り着いたレッキング・ボールに視線を移す。

「遅かったな」

ハムスターが操縦席から這い出し、何かをチューチューと話す。

「ハムスター語を翻訳。“下水に落ちた”」

「だから臭いんだ”、か？」と、ジャンカー・クイーンが鼻で笑う。「風呂に入らないからじゃないと言いたいんだな」

驚いたジャンクラットが、手を振り回す。

「し、知ってたのか!？」

振り向いたクイーンの顔に、先ほどまでの笑みは浮かんでいなかった。

「口を開いていいと言った覚えはないぞ、ろくでなし」

「こいつ、ロボットに乗ったウォンバットだぜ!？」

ジャンカー・クイーンが首を傾げる。

「だから何だ？貴様はネズミ野郎だし、相棒は猪顔だろう。そんなことはどうでもいい、早くお宝を渡せ」

レッキング・ボールのアーマーに手を置き、クイーンがレッカーズたちを指さす。

「チャンプ!道を拓け!」

レッキング・ボールがグラップリング・クローを使い、人の群れをかき分け突進する。そのあとにロードホッグが続き、フックを振り回して道を維持しながら進む。ジャンクラットも後に続くが.....その背中にはクイーンのナイフが突き付けられている。

4人は一団となり、曲がりくねった路地をよろめきながら突き進む。すぐ隣の道からは、獲物を駆り出す狼の群れのようにレッカーズたちが声を掛け合うのが聞こえてくる。

転がる速度を落とさないまま、メックのボールが4本の脚を展開して一団から先行する。直後にレッカーの1人が脇道から姿を現し、彼らにライフルを向けてきた。メックはそのまま空中へと跳ね上がり、回転しながらレッカーの上に着地する。グチャツと嫌な音が響く。

その音に、ジャンクラットが顔をしかめる。さらに、通り過ぎる際にレッカーの状態を確かめてもう一度顔をしかめると、先頭を走るロードホッグのもとへと駆け寄る。

「ロードホッグ」と耳元でささやく。

「ダメだ」

「ダメって、何が？」

「お前の作戦は、もうお断りだ」

ジャンクラットはもう少しで声を張り上げそうになったが、自分の賢明さを称えつつ、怒りを飲み込んだ。

「女王サマがお宝を手に入れたら、オイラたちは用済み。そうだろ？」

ロードホッグは何も答えない。

「だから、扉が開いたらオイラが合図を出す。いいな？」

「何をこそこそと話してる？」と、背後からジャンカー・クイーンが見咎める。

「お宝について」

一応、嘘はついていない。

「私の”宝だ」と訂正し、ジャンカー・クイーンは続ける。

「そもそも、宝とは一体なんだ？」

「見てからのお楽しみ、ってね。でも、女王陛下もぶったまげること請け合いだぜ！」

ジャンクラットはそう言ってケラケラと笑うが、残りの3人はそれに構わずジャンカーたちを倒しながら歩を進める。一行はそのまま、丘の頂上の広場のような場所に出た。下に目をやると、倒れた建物の基礎の部分に、鋼鉄製の扉が隠されているのが見える。ピカピカに輝くその姿は、風雨の影響を受けている様子はない。

あれが、最後の扉だ。

だが、レッカーズの一部がすでにその扉の前で彼らの到着を待ち受けていた。その先頭に立っているリーダーは真新しい包帯をつけており、握りの部分にダクトテープを巻き付けたお手製の大きなキャノンを掲げている。そのキャノンで何を撃ち出すのか、そもそも本当に発射できるのかすら分からないが、少なくとも本人は悦に入っている様子だ。

ジャンカー・クイーンは忌々しげに彼らを見下ろし、ジャンクラットの頭を叩いた。

「貴様は常に、私の定めた決まりを軽んじてきたな。だが、こうなっては貴様に背中を預けるしかないだろう。私がなぜ、ジャンカータウンを支配できているか分かるか？なぜ、人々が私に従うと？」

思案するように頬をさすり、ジャンクラットが答えようと口を開きかける。

「黙って聞け」

ジャンカー・クイーンはにべもない。

「当たり前だが、こいつらが義理堅いわけじゃない。見てみる」

言われるまでもなく、ジャンクラットはすでに見ていた。レッカーズが先ほどのキャノンをこちらに向けて構えている。

「私が貴様らより優れているからというわけでもない。もちろん、実際に“優れている”のは確かだがな」

ヴーン。キャノンが音を立てて、ビームを撃ち出す。膨大なエネルギー量により、その軌道は文字通り白熱している。ジャンカー・クイーンの頭上で、建物の大部分が一瞬にして消し飛ぶ。

「よく聞け」

クイーンはそんなことは意に介さず、燃えカスが流れ星のように降り注ぐ中で続ける。

ジャンクラットはしかし、丘の下にいるレッカーズのリーダーの動きに目を奪われていた。狙いを外したことに悪態をつきながら、キャノンの照準を調整している。

「よく聞けと言っただろう！」と怒鳴りつけ、クイーンがジャンクラットの喉を掴む。

「連中が私に従うのは、奴らが知っているからだ。事態がマズい方に進んだ時、群衆が押しかけて築き上げてきたすべてが炎に包まれる時、これをできる誰かが必要だと」

彼女はジャンクラットを放り捨て、斧とナイフを構える。

「斧を食らいたいのはどいつだ!？」

「連中が私に従うのは、奴らが知っているからだ。事態がマズい方に進んだ時、群衆が押しかけて築き上げてきたすべてが炎に包まれる時、これをできる誰かが必要だと」

咆哮をあげたクイーンは、レッカーズ目掛けて丘を駆け下る。単身で。

ヴーン。キャノンが再び一閃するが、笑い声をあげながら空中を舞っていたジャンカー・クイーンにはかすりすらしない。そのまま斧を振り下ろしながら砲煙に向かって飛び降りると、キャノンは爆炎をあげながら沈黙する。レッカーズのリーダーは、何やら金切り声で喚き立てている。周囲にいるレッカーズの下っ端たちもクイーンのもとに殺到するのが見え、ジャンクラットは取り得る手段を検討した。弾帯に残っているグレネードは4発だ。一方、レッカーズの数4人ではきかない。クックツと含み笑いをすると彼は、グレネードの1発をポケットにしまい込み、丘を駆け下って乱闘に飛び込んだ。

右手では、レッキング・ボールがグラップリング・クローを使って振り子のように疾走し、かなりの数のレッカーズを空中に吹き飛ばしている。反対側では、誰かが断末魔の叫びをあげているのが聞こえる。ロードホッグの猛攻をまともに受けた奴がいるらしい。

ジャンクラットがそのままレッカーズの間を突き進んでいくと、ジャンカー・クイーンの姿が見えてきた。

最後の扉に背中を預け、ナイフやこん棒、フック、銃など思い思いの武器を持った10人ばかりのレッカーズに取り囲まれている。彼女の足元にもほかに4人ほど倒れこんでいるが、こちらはどう見ても瀕死の状態だ。すでに彼女の武器は2つとも失われていたが、それでも誰も近寄る勇気はないらしい。

「遅かったじゃないか。こっちに来な！」

「ジャンカー・クイーン様の仰せの通りに！」と返すジャンクラットの言葉には、皮肉の響きは込められていなかった。

ジャンカー・クイーンが頷き、痩せこけた彼の胸に手を置く。「忠誠心なんてクソツタレさ。避けとくに越したことはないよ」

ジャンクラットの胸に置いた手を離すと、彼女の指にはグレネードのピンが3つ、指輪のようにはめられていた。

「目玉は吹き飛ばすんじゃないよ？扉を開けるのに必要なんだから」

心からの賞賛の念を胸に、ジャンクラットは爆発寸前のグレネードを身に着けたまま、レッカーズの中に飛び込んでいく。この後、彼女を裏切らねばならないことが惜まれるくらいだ。

走りながら冷静に周囲を見渡すと、ちょうどメックのボールがこちらに向かってくるのが目に入った。彼はそのままレッキング・ボールに飛び乗り、グラップリング・クローのワイヤーにしがみつくと、振り子運動に合わせて地上から離れていく。半円を描く弧の頂点でボールから離れて空中に飛び出したジャンクラットは、グレネードをレッカーズの集団目掛けて放り投げる。

ドカーン。彼はそっと目を閉じ、顔に笑みを浮かべる。人生は素晴らしい。

ドカーン。レッカーズが叫び声をあげる。ジャンクラットは両腕を鳥のように広げ、背中で爆発の熱風を味わう。

ドカーン。やがて、彼の体が重力にとらえられる。——おっと。

ジャンクラットは目を開き、急速に迫ってくる地面を見据える。

「ロードホッグ！受け止め……」

「たたき起こせ」

クイーンの声だ。

ロードホッグがジャンクラットの体を持ち上げ、空中で揺らす。じきに足が地面につき、ジャンクラットは自分の脚で体を支えた。

ぼんやりとした様子で、彼が尋ねる。

「勝ったのか？」

「見れば分かるだろう？」と、最後の扉を開けるための光学スキャナーが設置されたすぐ横の壁にもたれかかりながらジャンカー・クイーンが問い返す。その周囲には、レッカーズの連中が転がっている。受けた攻撃の痕跡は様々だが、一様にボロボロだ。チャンピオンがメックを降り、レッカーズのキャノンの破片を調べながらハムスター語で嘲るように独りごちている。

「勝ったんだな！」

「ああ、そうだ」

クイーンが辛抱強く返す。

「さて、お手並み拝見と行こうか」

「もちろんですとも、女王陛下！」と、揉み手をしながら彼がタイミングをうかがう。

「ロードホッグ！今だ！」

ロードホッグは、ぼんやりと彼を見つめ返す。

ジャンクラットは焦ったように付け加える。

「おい、今のが合図だぞ！」

ロードホッグはやはり、肘を掻くばかりだ。

傷だらけのクイーンの手が、ジャンクラットの首根っこをがっちりと掴む。まるで、「この男の所有権は私が握っている」と示すかのようだ。

「合図を出したらどうするか、作戦を伝え忘れたか？」と問いかけるジャンカー・クイーンの声は柔らかく、うっかりすると優しさを感じ取ってしまいそうなほどだ。ハムスターはすでにメックに戻っており、呆れたように首を横に振っている。

ジャンクラットは慎重に思い返してみた。

「そういえば、そうかも……」と悲しげにつぶやく。

「残念だったな。次の機会をうかがっておくことだ」

そう言い捨てると、クイーンは掴んでいた彼の首を持ち上げ、光学スキャナーに顔を叩きつける。

「アクセス承認」と扉から音声が出る。

ジャンクラットが「ふげほごご」と言葉にならない音を発する。

最後の扉が小さなブンという音とともにスライドして開く。その向こうには、冷気の漂う深い暗闇が広がっている。ジャンカー・クイーンは扉の向こうに一步足を踏み入れ、暗闇を見通すように目を細める。すぐにその目が上に向けられる。しかも、かなりの高さまで。

「パイロットの驚愕を検知」というレッキング・ボールのメックの自動音声が出、静寂を破る。

周囲を見渡すロードホッグも、マスク越しでも分かるくらいに啞然としている。3人の驚きようにジャンクラットは満足感を覚え、しばしの間、誇らしさで胸がいっぱいになる。

「貴様ら2人は」と言いながら、ジャンカー・クイーンがジャンクラットとロードホッグを指し示す。

「30秒以内にここから消えろ。あれだけの騒動を引き起こしておきながら見逃してもらえることを、有難いと思うんだな」

抗議しようとするジャンクラットを無視し、彼女は部屋の方へと向きなおると、レッキング・ボールのメックをポンポンと叩いて声をかける。

「こいつを飛ばせそうか？」